

Playing with the Plural Use of the First Person “ We ” :

A Prologue to Further Discourse on “we” from

Kato’s “*After Defeat in War*”(『敗戦後論』)

by Mashimo Shinobu

Kato Norihiro, the author of the discourse, insists that after we, the Japanese people, lost the Second World War, we also lost our identity as the Japanese “nation”. Since that bitter experience, the identity of the Japanese people has been divided. While some of the people stand by their Left Wing opinions, based on Marxism, others stand by their Right Wing opinions, based on nationalism, and communication between the two groups has become impossible. Thus, Kato suggests, we, as a nation, have become “distorted”, and to modify this condition we must construct a new “we” which represents all of the Japanese people, transcending the present division of opinions. Kato’s suggestion has been criticized by almost everyone. Isn’t his insistence on the construction of a new Japanese “we” both anachronistic and nationalistic? Wouldn’t such a step return us to the old Japan, before the World War?

To answer these questions, we must analyze Kato’s discourse, questioning the meaning of the plural in the description of the “subject” in his essay. In his description of the “subject”, Kato adopts four ways of expressing the first person in Japanese: <わたし>, <わたし達>, <われわれ>, and <「われわれ」>. Isn’t he in fact playing with the expression of the first person, first between singular and plural, and then among the plurals alone? In this paper, I hope to make clear that in spite of his stated intention of constructing a new “we” (<「われわれ」>) as an expression of “nation,” Kato’s “we” finally converges on and assimilates with the first person singular “I”. This means that the “we” which he wants to construct will actually disappear in the assimilation with “I”, and the positive sense of “we” in its plurality will be lost forever. “We” (plural) dissimulate ourselves under the mask of “I” (singular). Kato’s descriptive style, by adopting four different expressions of “subject” in the construction of a new “we”, reveals the actual loss of such concepts as <difference>, <outside>, and <others> in this assimilation.

Kato claims his “we” is conceived through a plurality of opinion. However, he actually first assimilates others into his “we”, and finally into his “I”. Therefore, what he has built in his essay is not a “we”, but rather an egocentric “I”. In the fact of Kato’s “we”, we must try to open further discourse on “we”. This paper is prologue of a continuing essay for that purpose.

Key Words: Kato Norihiro, *After Defeat in War* (『敗戦後論』), Playing with the first person, Discourse on “we”, Thinking from <others>

<われわれ>に戯れる<一人称>： 『敗戦後論』から<われわれ>のディスコースを展開するための序論

I 噛み合わない論争

1995年の『群像』一月号に発表された、加藤典洋の「敗戦後論」、その是非をめぐって様々な議論が引き起こされた。その殆どが、加藤への批判的論調であったが、その論争の中で、私に近い立場は高橋哲哉の批判であったが、加藤 高橋の論争は、何度かの意見の応酬の後、一転鋒先は収まってしまったかのように見える¹。提起された問題は非常に重要で、かつ現代という時代全体に本質的に関わっているのであるが、<国内の三百万の死者と外国の二千万の死者の甲い>の後か先かという点を含めて、幾つかの象徴的な問題へと論争は集約されてしまい、「日本人としての主体「われわれ」を立ちあげる」という加藤の本来の提言が、正面から十分論議されなかったように見える。その上、2人の論争が思いのほか、噛み合わず、すれ違ってばかりいる、という思いを抱いたのは私だけではあるまい。一つ一つ用いる概念が、互いに見事なほど、そっぽを向いている、つまり交差しないのである。両人が用いる言葉が、生まれた土壌が全く違い、育った環境も異なることで、そこに咲いた花や実が、大きさから色合いまですべてを別にしている、そんな印象であった。同じ衣をまとってはいるが、<見ず知らず>の概念や言葉は、互いに主張しあっても、主題としているテーマについて<出会う>ことはできないのだろうか？

加藤の一つ一つの言葉と思想は、高橋の問いかけに<応える>必要から、急ごしらえされたかのように見えるものも含めて、ハイデガー以降の思想に興味をもつ者にとって、聞き慣れた言葉ではある。<主体>、<他者の思想>、<責任 応答>、<享受>、<共同性>、<公共性>……。しかし、その殆どが、現代思想が提起し展開する意味から<移動>されてしまっている。このような状況で、2人が真剣に、かつ概念の厳密さを求めて議論を交わせば交わすほど、両者の隔たりは大きくなり、全く噛み合わない状態で論争は終結を迎えざるをえないことは予測された、と言えるかもしれない。

結局、このような結果が教えたことは、論争というものが、さらにコミュニケーションというものが、いかに困難な試みであるか、という現実であろう。特に、加藤のように、経験を軸に、<内側から>思考することの正当性を標榜する者にとって、<内 - 外>の隔絶された空間が前もって前提されてしまうという問題以上に、何よりも<内側>という特権的な場所をコミュニケーションの場に持ち込んでしまう、という点が問題となろう。論理の根拠であるとともに、最終的に自己弁護の拠点ともなるこの場合は、<自己>疎通を求めはずのコミュニケーションという行為に、疎通しえない部分を<切り札>として用意することで、<内>を<外>に伝え、<外>に耳を貸すという、決して終わることのない行為であるはずのコミュニケーションを<閉じて>しまい、すべてを<内 内>の関係へと、つまり判定者としての<内>の専制と、互いの切り札である<内>への<尊重>を優先するあまり、単なる互いの主張の交換にしかすぎない行為へと墮

落させる。この際、コミュニケーションは、自らの〈内〉に対する、〈外の内〉からの〈無私〉なる行為、つまり他者（＝外）が献身的に自己（＝内）犠牲の精神を発揮することへの過度の期待へと変容し、「分かって欲しい、分かってくれるはず・・・」、そのバランスを一方的に傾けながら、さらに〈内〉を共有しえない他者へと非難の矛先を向ける、「分からないのは相手が悪い」、というまさにお定まりの〈公正〉を失った、一方的な〈内〉の暴力的デイスクールへと姿を変える²。

〈内側〉の共有は可能か？それがコミュニケーションに絶対的に不可欠なのか？そして、〈内〉の専制は超えられるのか？ここで、私たちはナンシーの問題群に向き合っている、コミュニケーション communication, 共同体 communaute, コミュニオン communion, 共産主義 communisme という〈commun〉という語を軸に展開される関係項。彼は、これらの問題群において、〈共通なるもの le commun〉を中心に据え、例えば共同体に関してなら、理念とか、民族とか、血の純粋性というような、そこから〈何かを共有する〉という幻想が生み出す〈内在〉の脅威と危険を繰り返し指摘し、20世紀のナチズムとソヴィエト共産主義という〈人間〉の夢をかけた実験の残酷な挫折をその点から分析するとともに、コミュニケーションに関しても、意味伝達を目的とした、言葉と言語構造の厳密な規則性や内在性へと問いかけるのではなく、私たちが〈伝たえあう〉ことが可能であるために、互いに前もって〈分かちもつ（分割＝共有）〉こと、それが言葉であり、民族であっても、それらが決して完成した一つの系として〈閉じる〉ことなく、自らを超える＝外に向かう、つまり諸々の他者に〈接続〉しているという事実へと目を向けさせる。彼の、〈共にある etre-en-commun〉思想、あるいはパルタージュ partage の思想は、〈内〉と〈外〉という分節を無限に延長し、延期する運動において特徴的である³。

私たちも、常日ごろ、会話が日常の挨拶によって交わされる親交の交換を越えて、何かを伝達しようとするそのとき、単に〈同じ言葉を話す〉という言語の〈共有〉からでは、あるいはそれゆえにこそ、かえって全く噛み合わないという現実直面する。私たちは、そんな事態を回避するために、自分の用いる用語また基本的な姿勢というものを、先に、あるいは進行に沿う形で表明しながら会話を進める。しかし、それでも互いにコミュニケーションの齟齬を実感しながらでしか、自分の考えを伝えられないことに忸怩たる思いをすることがしばしばではないだろうか。論争のような、相手の意見、論理を論難するかたちで遂行されるコミュニケーションにおいては、その主眼は自らの論理で相手のそれを論駁するわけであるから、論旨等を共通化 communication しようとする試み以上に、互いの差異が強調されることになる。すると、差異を差異化する、つまり互いに〈分かちあう partage〉ことへの、それへの存在了解を〈共に〉することなしには、結局、二人の議論は〈向かい合い〉ながらも〈出会う〉ことなく、〈すれ違い croisement〉に終わってしまう。

しかし、コミュニケーションが、先行する〈共有するもの〉によって制約されないということは、既製の表現から、定型的な決まり文句から開放され、言語という強制からも幾分解放され、そこに新たな自由なコミュニケーションの可能性を開くことにもなる。それは、互いのパルタ

ージュの経験をどこまでも展開しながらも、例えば、翻訳が不可能であるからこそ、翻訳に向かい合い不可能へと挑戦する行為を試行することで、限界 = 境界をそれとして、あるいはその垣根を広げつつ、互いの言語の可能性と意義を高めうるのである、と信じる行為とも通じるものがある。そのためには、何をさておいても〈他者の思想〉に耳を傾けなければならない。それなくして、互いが互いの境界において、言語の、言語という限界において、限界 = 境界にあればこそ〈分かちあう〉、ということなど体験できるはずもなからう。

しかし、二人の論争は〈噛み合わない〉ままに非常に多くの示唆を与えてくれた。いや、噛み合わないがゆえに、同じ言葉で語りながらも、両者の言語が同じ言語に翻訳されないがゆえに、より興味深いものとなったとすることができよう。その点で二人に感謝しなければなるまい。特に、加藤の最も基本的で最も根本的な主張である「日本人としての主体である「われわれ」を立ちあげること」、この主張の持つ意義は、非常に大きなものがある。今まで様々な方面から、胡散臭さから、その使用が躊躇されてきた言葉の数々を一つの文にまとめるとこんな表現になるのかと、この余りにもその身近さゆえに、危険極まりない言葉と思われて来たものを一つにまとめた加藤の力技に感動さえ覚える。〈日本人〉、〈としての〉、〈主体〉、〈である〉、〈われわれ(を)〉、〈立ちあげる〉。これらの言葉の一つ一つは、それらがなければ何も語れないほどに頻度高く用いられる。それゆえに、また各人がそれぞれの強度な思惑のもとに使用するがゆえに、パルターージュの幅は非常に広い、あるいはその〈分かちあい〉を無限に展開しうる言葉でもある。それらを、いかなる思惑があろうとも、〈或る〉制限された目的のために向かい合わせ *adresse*、一つの〈分かちあう〉場へと導くことができるのだろうか？

デリダを中心とする現代思想に臨んで来た者にとっては、レヴィナスも語るように、まさに思索とはこのような「主体という概念との闘い⁴」であったわけだ。主体、それを〈私 *je*〉、〈自我 *moi*〉、あるいは〈自己 *soi*〉として思索してきた歴史、特に近代以降の歴史において、デカルトが示す直接的確実性とは裏腹に、それを新たな懐疑の対象としながら、その名のもとに、各自がそれぞれに問いかけ続けてきた〈自己への問い〉の集成、それが哲学の歴史そのものであったとも言うのだろうか、しかし、現代思想は、その問いかけ自体を形而上学として断罪し、主体としての自我を解体することで、哲学そのものへさらに新たな問いかけを行おうとする。とりわけ、主体としての自我や自己へ向けられた不信は大いなるものがある。そのような状況の中、加藤の「新たな主体」への呼びかけは、当初から、不可能なことへの参加の呼びかけであり、現代思想にとっては自らの出自を否定することへの呼びかけでもある、と述べている。

今日、私たちは、超越論的現象学や精神分析学の経験を経て、主体として自己を、単独で、その個別的な形態のもとに問いかけることはしない。基本的に、それはそれ自らでその確実性を立証できないし、その位置や場所を特定することはできない、ということをも自明のこととして共有している。それは、世界を構成する核としての、その中心からはずされ、間 - 主観的な関係の中に、〈関係〉の項目の一項として思索されるようになった。実体思想や階層秩序的な二項対立思考に支えられて、世界の中心として、あるいは存在者の意味や真理を固有化しうるこの現在とい

う先端の優位性において、自己を孤立化、絶対化することは、自己中心主義、ロゴス中心主義、音声中心主義、人間中心主義などというレッテルを貼られ、まさに〈現前 presence〉の思考として糾弾される。

しかし、これに対して、なぜ哲学において、人間が自らを問いかけ、人間としての自己形成を目指す行為、人間が自ら人間であるゆえんを問いかける行為、また私というものが〈自分とは何か〉を問いかける行為、そのようなフマニズムの根本的な思索を、その高邁な行為までもを否定しなければならないのかと、疑義を唱える人もいるだろう。さらに、ヒューマンズムを、人間中心主義、自民族優越主義そして自己中心主義、ファロス(男根)中心主義へと、一気に等式で結びつけるこの思想が、人間の活動の殆どすべてを、その中心(=優越)主義へと還元し断罪する態度に、その余りの単純化と簡略化に、かえって暴力的な還元主義そのものを見る人もいるだろう。このような単純化を行う現代思想の流れに対して不信感を持ち、当然、人間と人間の可能性を矮小化する行為として断罪することは理解できる。疑念はさらに疑念を生じ、現代思想が、その固有性を表現するために、近代からの流れや形而上学そのものを一つの大きな物語のもとに凝固させ、自らを〈小さな物語〉の語り部とする行為に対して、なぜ、小さな物語しか語れないと主張する人々が、近代以降に対しては簡単に単純化して、〈一つの物語〉として語ることができるのだろうか、という疑問も当然起こるだろう。また、二千年以上にわたる歴史の経過を連続性の視点から理解しようとする行為、あるいはそれを非難しながら、そこに〈非連続性〉を対置させるような行為に対しても、忘れてはならないことは、両者がともに、いつもすでに目の前にある、〈非西欧〉が体现する〈非連続性〉の豊かな事実に対して故意の言い落としをしているということである。西欧を考えるのに、その連続性と非連続性で考えること自体が、いまだその驕りに囚われている証拠ではないか、〈前もって〉一つの自己完結した〈外部〉から独立した孤高な系として西欧を考えるから、そこに連続性なるものが根源からの捏造として生じるのであるし、当然捏造であるからこそ、そこにまた非連続性を対置するという悪循環を引き起こすことにもなる。現代思想もその轍を抜け出していないのではないか、あるいはその轍を認めてはいるがその中で開き直ってはいないだろうか、と指摘もできよう⁵。

現代思想は、特に〈他者〉と〈外部〉が積極的に肯定される思想であるがゆえに、そこに期待がある、が、〈他者〉と〈外部〉の捉え方自体が、すでにそれぞれの言語とロゴスに侵食されている、私たちは、〈外〉から〈西欧の他者〉としてそれに参加する際の違和感を抜きにしては、共に思索することはできないであろう。いつまで、この違和感を他者の鏡として維持できるか、それが重要となる。私たちはここで、ナンシーの提起した〈共にある〉という存在形態を、〈われわれ〉という、いわゆる自我よりも〈忌むべき〉、〈共同体の主体〉として一般的に理解されている形態から、脱構築することで、現在という時代に喪失感が先に立つ、〈他者たちとの限りない共存〉という事実を確認するために、〈われわれ〉論の展開を試みることになるが、この試論がまさにその序論となりうることを期待したい。

II 主体としての〈われわれ〉の立ちあげ

この違和感を懐に、新たな思索へと向かい、また、先の数々の現代思想への疑念にもかかわらず、それへの参加を正当化するものは、やはり〈出来事〉の共有にある。すなわち、第二次世界大戦の体験。ホロコースト、南京虐殺、原子爆弾の投下……。これらの〈出来事〉以前と以降では、全く思索の意味が変わったということに同意せざるをえない。〈人類史上類のない事件〉としてナチズムをはじめとする数々の犯罪が行われたという事実は、決して払拭することはできない。人間の、人間という鏡が変わったのだ。地球上の、多くの民族はすでに〈民族史上類のない事件〉を数々経験し、民族の記憶を報復への経済の中に蓄えているのであろうが、世界戦争は、今まで歴史の片隅に置かれていた国民も強制的に巻き込んだ結果、地域の事情は異なるにしても、それを越えたところで加害者 被害者の双方において、この憎むべき〈人類史上類のない〉愚行への反省的合意ができたこと、また、〈人類に対する犯罪 crime contre l'humanité〉への無期限での訴追等が正当化されたこと、これらを通して世界は、何よりも、この合意が、負の遺産の上に作られたことは遺憾ではあるにしても、全世界共通となりうる行為の基準が示された、ということ認めざるをえないであろう。つまり、〈違和感〉を越えて、〈違和感〉を土台に、それでもこの世界に〈共にある〉、共に参加するものとして、現存在 Dasein をその本質である〈他者と共にあること Miteinandersein〉に向けての〈世界〉 - 内存在の思索として、要するに〈われわれ〉という思索の創設として、理解するための第一歩はすでに刻まれているといえよう。

地球規模での〈われわれ〉の創設は、その創設の事情によって、政治・倫理的に染め抜かれている。しかし、私たちは、〈われわれ〉をその〈本質〉において思索しなければならない。それは、現代というグローバルな時代において、目に見える差別を克服しようとする運動に加えて、それとは反対に先の〈違和感〉を掌中に抱きながら、〈差異〉を自分の存在論的根拠として温存しようとする行為でもある。このような状況において、〈われわれ〉とは、つねに増殖する61億という人口に加えて、この地球に共に存在する〈他なるもの〉との棲み分けによって成立する、地球全体のエコシステムを代表する〈主体〉として、自らを宣言することになるだろう。私たちは、まず自らが包摂する、あるいは包摂される世界、その世界の絶対的な拡張を覚悟しなければならない。

さて、〈われわれ〉という〈主体〉を考えると、それが一方で地球全体を代表する〈主体〉であることへの〈法外〉さに畏敬を感じるとともに、一種の〈迫り来る足音の恐怖〉に身震いする人もいるかもしれない。声高に連呼される〈われわれ〉の影、消せない記憶。どれだけ、〈われわれ〉という無神経な、無限定な内容によって、一喜一憂し、かつ生かされ、かつ殺され、破壊されたか。〈われわれ〉は、かつて殺人者であり破壊者でもあれば、その犠牲(者)でもあった。

何よりも、〈われわれ〉は自由にその〈所属〉、〈人数〉、〈内容〉を変えることができる。

実際に、誰を、どんな組織を、どんな仲間を、どんな集合体を、指しているのかが指示されず、自在に利用される。その意味で、相手に対して、相手との関係において、相手からの〈眼差し〉に、〈われわれ〉は本来の指示範囲を負っている。私たちが、〈われわれ〉と発話するとき、そのレファランスは、本人の思惑を超える。それは、内容の限界を指定できないばかりか、ある意味ではその包摂するものの境界を操作しているのであるが、相手とともにその広がり境界を模索する。〈われわれ〉は、互いに探り合う。

また、ある時は、勝手に思いもかけない〈われわれ〉の一員として囲い込まれて不愉快な経験をすることもあるだろう。この意味で、〈われわれ〉は自分の内と外を自由に使い分け、その時々思惑で〈囲い込み〉を行う。そして、残りの人々を、この〈われわれ〉から排除したり、あるいはその中に意図的に組み込むことで、その暴力性を遺憾なく発揮する。〈われわれ〉という発話自身が〈排除 囲い込み〉の暴力であり、差別の道具であり、内 外の絶えざる排出である。〈われわれ〉は、〈他者〉を自由に創造し、〈他者〉を自由に操作する。この際、絶対的な他者は姿を消す。〈われわれ〉は、あちらに行ったりこちらに付いたり、場所を持たない u-topique な〈主体〉である。

さて、加藤の「「われわれ」を主体として立ちあげる」という提言に触れたときの困惑に多くの人は悩まされたであろう。何しろ、その指示範囲は、1人から2人へと複数化の過程を経て、1億2千7百万人、さらに61億人を越え、無限数まで拡大することができる。指示する内容がこの無限の範囲内で自在に変わりうることから来る対話者相互の思惑の介入。政治的な事象の介入。何しろ〈われわれ〉は、自分に有利なように自分に化粧を施す。この〈われわれ〉には、君も知ってる〈あの人〉や、有名な〈あの人〉も含まれているかのように……。聞き手も、さらに自分の思惑に従い、共通なはずの〈われわれ〉を脚色する。〈われわれ〉は、それを語る者およびそれを耳にする者双方において、意味する範囲が異なるだけでなく、加工される。〈われわれ〉は、いつも自らの詐取や詐称に、そして偽善性に曝されている。単なる、コミュニケーションの齟齬なのか、それとも意識的な操作なのか、無意識の誤解か、それとも……。言葉にされても、沈黙においても、この〈われわれ〉には、ほのめかしや言い落とし、そしてレミニセンスが付着している。

本来、相互に理解された〈われわれ〉は、発話されるたびにそのコンテクストに従って修正される。しかし、非定形な指示作用しかもたないこの〈主体〉は、発話者側と対話者側の双方での内容のずれを知らず知らずに顕在化することで、各人が了解している言葉自身の意味や範囲のずれに呼応する。その際、同じ言葉を使っているにも関わらず、コミュニケーションが同じ地平で行われている、との互いの了解があるにも関わらず、奇妙な齟齬に付きまといられる。実際、言語とコミュニケーションは、その意味と指示範囲を含めて、決して〈同じ〉言葉や〈同じ〉地平を共有させてはくれない。逆に、〈同じものの共有〉への幻想、その非根拠性をも露わにする。それが言葉であり、コミュニケーションであろう。より深く、より真剣に、より確実に、より理解し合おうと語れば語るほどコミュニケーションは差異を顕在化することがある。

特に問題なのは、発話の行為遂行的側面での問題であろうか。〈主体〉は、その名のもとで発話され、行為が行われるものである。しかし、〈私〉ではなく、〈われわれ〉がその行為の主体として指示されるとき、その意味する内実の非定形性は、実際には〈誰が〉その行為の主人公であるかの特定を困難にさせるだけでなく、隠蔽する。いくら声高に語っても、あるいは最初からそれを目的とてかは分からないが、発話者が、声高に繰り返せば繰り返すほど、〈われわれ〉という言葉のうち、あるいは裏に、自らは隠れてしまうし、自らを隠してしまう。〈われわれ〉は、本来の他者を失い、同時に自分をも喪う。つまり、呼びかける他者も、それに〈応える repondre〉ことで形成される自己も、同時に、喪失する。応答可能性 = 責任 responsabilite の放棄。一方で、〈われわれ〉には、もはや他者の〈顔〉が見えないし、訴えかけるその〈眼差し〉を理解することもない。他者の不在、面前の苦悩する、傷ついた、死に瀕した他者は〈存在しない〉ほどに盲目となり、他方、〈われわれ〉は人称のない、名前のない、単なるマスとして番号を打たれ、記号化されたものの集合に墮する危険にいつも曝される。そして、どちらからも、呼びかけに〈応える〉ことを忘れてしまう。

このような〈われわれ〉が、〈私〉という単数性（「天皇」、「ヒトラー」など）と結びついたときには、その偽善性、幻想性あるいは非根拠性、無責任性が限りなく発揮される。〈われわれ〉は、唯一なる〈私〉と親密に、絶対的な敬意のもとに結びつき、個々の私としての〈われわれ〉を徹底して隠蔽 = 喪失することで、この〈私〉を受肉化し、同化されることを熱望し、また同化された振りをしうる。〈われわれ〉は、単数性にあこがれ、その単数性の仮面をかぶる。その単数性にいつも裏切られることを知りながら、あるいは単数性の憧れ自身に裏切られながら。なぜなら、単数は複数と共にしか存在しえないというダブルバインドから逃れられない。それは、〈特異〉とも、〈至高〉とも戯れながら自己を崩落させる。〈われわれ〉は単数の仮面をかぶろうとして、いつも失敗する。その〈単数〉の仮面が、〈天皇〉のものであれ、〈ヒトラー〉のものであれ、あるいは主権者としての〈国民〉という仮面であっても同様である。しかし、〈われわれ〉は、繰り返し繰り返し、自らを単数化しようとする執拗な努力 conatus のうちに自らの存在意義を見出しているかのようである。

さて、この点を理解するための絶好の素材が加藤の『敗戦後論』の中に与えられている。それは、1991年に勃発した湾岸戦争に際して、「若い文学者を中心に出された「文学者」の反戦署名声明なるもの」であるが、加藤によると、「ことによれば外国向けの修辞として作文されたこの声明は、「戦後」の自己欺瞞が半世紀も続くとうなるものかを示す、好個の例証」であるとされるものであり、彼自身は、この反戦声明の欺瞞性を、戦後憲法とその「平和条項」の出自の沈黙へと指弾し、幾つかの根本的な事実認識の誤りを指摘しながら、彼らの歴史感覚の不在を糾弾する⁶：

ここに欠けているのは、一言でいえば公共的な感覚だが、公共的な感覚が文学と無縁だというのは、文学者のひとりよがりな考えにすぎない。この声明に数十名の文学関係者が関与

し、しかもここに見られる言明の中身の虚偽に、ほぼその全員がさして自覚的でなかったという事実とともに、この社会性の忌避の感情は、この時期の「文学者」のあり方として、一つの指標の意味をもっている。

III <われわれ>の存在証明とその罨

かく指弾された声明文は次のとおりである⁷：

声明1

私は、日本国家が戦争に加担することに反対します。

声明2 (三つのパート part への分解は筆者による)

(Part1) 戦後日本の憲法には、「戦争の放棄」という項目がある。それは、他国からの強制ではなく、日本人の自発的な選択として保持されてきた。それは、第二次世界大戦を「最終戦争」として闘った日本人の反省、とりわけアジア諸国に対する加害への反省に基づいている。

(Part2) のみならず、この項目には、二つの世界大戦を経た西洋人自身の祈念が書き込まれているとわれわれは信じる。

(Part3) 世界史の大きな転換期を迎えた今、われわれは現行憲法の理念こそが最も普遍的、かつラディカルであると信じる。われわれは、『戦争の放棄』の上で日本があらゆる国際的貢献をなすべきであると考えている。

われわれは、日本が湾岸戦争および今後ありうべき一切の戦争に加担することに反対する。

加藤の言によれば「私たちに法の感覚がないこと」を如実にあらわす好個の例であり、「私たちに戦争に反対する理由があり、それが、私たちに戦争を反対させ、また、平和憲法を保持させる」という本来、当然の順序で展開されるべき反戦への主張が、その論理性において逆転している、すなわち「ねじれ」しているとされる声明である⁸。

彼の批判に同意する、しないに関わらず、この声明から奇異な印象は拭い去れない。まずは、声明1と声明2の二つの声明の存在。最初から、この声明の発表にあたり、わざわざこの声明を発表しようと決意した、この声明の<主体>が分裂していることが伺われる。かてて加えて、両者の声明文の主体、叙述の主語が違うのが目に付く。前者が<私>であるのに、後者は<われわれ>となっている⁹。

声明1のような一般論的な宣言には同意できても、<湾岸戦争に反対する>という一事にさえも合意形成がなされないほど、「若い文学者たち」のあいだで喧喧譁譁の議論がなされた痕跡が

そのまま映し出されている、と同時に、この最終的な妥協の結果の所在をも明確に示しているのが、二つの〈主体〉の別々な声明であろう。つまり、〈私〉としては、個々のこの戦争ではなく、いかなる戦争にも「加担することに反対する」。それは、〈私〉の原則論であって譲れない。この点では一致できる。しかし、湾岸戦争への反対を〈私〉の立場からは表明できない。つまり、戦争への反対は、すべての人々に共通する普遍的な〈真理〉や〈正義〉と言いうるものであり、人類全員に共有されるべき大きなテーマであり、そのようなコンテクストの中、人類一人一人が〈私〉として個人的に担うべきものである。この、何か具体性が欠けたような、無自覚で抽象的であるかのような印象は、主語の〈私〉と、加藤の言を借りるなら「文学的ニュアンス」にまで貶められた、もう一つの文の主語「日本国家」とのあいだに穿たれた大きな深淵、そこから与えられるのであろうか？両者は全く和解出来ない二つの要素であるかのように隔絶している。まるで、〈私は、私とは無関係なという関係しかもちえないような日本国家が、戦争に加担するかどうかだけは、私に関係するのであるが、それに対してだけは反対する。というのも、戦争に加担すると、私も無関係ではいられなくなるから。それだけは断固拒否する〉、とでも語っているかのようなのである。ここには、〈私〉と〈日本国家〉を結びつける、その一つの可能性として、加藤の言う〈われわれ〉は確かに徹底して不在である。レヴィナスが語る、〈無関心ならざること non-indifference〉に表明される二重否定が止揚せずに引き受ける、〈それでも〉という決意にまで結びつく、積極的な責任への応答が感じられない、と思うのは、声明2との対比関係の妙だけではあるまい。

一步譲って、ここに彼らの明確なメッセージがあるとすれば、それこそ〈われわれ〉への拒否であると考えられることもできよう。〈日本国家〉との関係において、絶対に〈われわれ〉という主語を用いることへの拒否。その結果が、声明2においても実に奇妙な形であらわれてくる。この内容に関して、私は加藤ほど「姑息なレトリック」であるとか、「虚偽の声明」であるとか、「事実と反する」とかを主張する気持ちはない。ただ、余りにも妥協が過ぎて、本来の拠って立つところを見えなくし、個々の主義主張をできるだけ棚上げにし、黙説法を駆使して個々の問題の所在とその核心を暈かしてしまう。また、その声明の受け手に対しても〈語りえない〉部分への共感、つまり〈われわれが語らない部分については、それがなぜだか分かっているよね〉、というような前提を〈当然の共感〉として期待するような甘えの構造が透けて見えるだけでなく、本来のコミュニケーションがその不可能なところに顕わすパルターージュの〈分かちもつ〉関係を操作しようとするような独りよがりの傲慢さを感じる。

この短い声明文2を分解すると、3つの部分に分けられる。彼らの立場に立って推測すると、まずは、第二次世界大戦と戦後日本への〈基本的認識〉が語られなければならない。これはより主観性を取り除いた〈事実の列挙〉という形式で表現されることが望ましい。少しでも主義主張、ましてやイデオロギーが前面に出るような表現は避けて、ニュートラルな表現が望ましい。反対の根拠は何よりも〈平和憲法〉に求められるべきであり、その出自は、最終的には〈日本人が自発的に憲法として選択した〉という事実を、何よりも50年以上もそれを〈保持してきた〉とい

う事実によって遡行的に立証し、そのように現在から過去を捏造するという〈現前〉の暴力を駆使して見せる。この偽善的方法は、まさに「第二次世界大戦を「最終戦争」として闘った」とする、この「最終戦争」という言葉に見事に集約されている。言葉の詐取はここに極まれりといったところであろうか。そして、第一部は「とりわけアジア諸国に対する加害の反省に基づいている」で終わる。ここまでの文には、意識的に主体である〈誰が〉が省略されている。しかし、三段論法にならってか、大前提として、〈事実・真実の列挙〉と目されるこの部分の内容は、それを完璧に裏切っている。「姑息なレトリック」で済ませられるものでもない、的確な表現を用いるとすれば、まさに〈言葉のファッショ〉であり、平和を目指すと言う目的の正当性、とそれに参加するための有意義な妥協という意識が、本来の目的とは全く逆のことをここに出現させる結果になっている。

第二の部分は、小前提として、さらに奇妙な一文で構成されている。一見、意味と目的が不明な言葉が挿入され、それが前の部分の、実際には〈事実の列挙〉とは違う、傲慢な独りよがりの文に〈正当性〉を与え、同時に最後の主張を結論として展開するための構造上の補助的な機能を果たす。この一文は、署名者たちの無自覚、無責任な姿勢をさらに際立たせる：「のみならず、この（「戦争放棄」の）項目には、二つの世界大戦を経た西洋人自身の祈念が書き込まれているとわれわれは信じる（下線は筆者）」。なぜ、ここに、こんな一文が、前半部のあれほどの黙説法に近い、殆ど語らないで圧殺する、暴力的、それゆえ宗教的な思い込みにも近い構文から一転し、末尾に「われわれは信じる」などというような、第一部の文彩である中立性を破壊するような、言葉を加えるのであろうか。その理由は一つしかあるまい。第一部に理論的裏づけを与え、論理的な正当性で支えるには、またまた、「西洋人」に登場してもらわなければならない、ということである。それが、まるで「二つの世界大戦を経た西洋人自身の祈念」であるなどという、もっともらしさを証人としなければ、自分たちが語ることの正当性を確立することができない、と言っているかのようである。声明1が示しているように、〈私〉と〈日本〉があまりに隔絶してしまったために、〈私〉が〈日本〉について語るには、〈西洋〉という仲介者が必要になってしまったのだろうか。日本という国が成立・維持されるためには、〈日米安保〉つまり〈アメリカ合衆国〉の意図が優先するということが常態化してしまったかのよう。それに対する、彼らの答えは〈oui〉であるようだ。というのも、この部分が第一部を〈正当化する〉、つまりそれが〈日本人たちの思惑（実際そうかどうかは分からないが）〉を超えて「西洋人自身の祈念」であることしか、彼らにとって前文の事実性の証明はなされないということになる。この声明の成立根拠はそれ以外のどこにもない。前文が、ここで根拠付けられたと考える彼らは、一安心したせい、ここで始めて、しかし恐る恐る、〈われわれ〉という、先の声明1では欠けていた〈私〉と〈共同体(日本)〉を結びつけるであろう〈可能性の主体〉を表明する。このような形なら、彼らは〈われわれ〉という共同性のもとに自らを発することができるのであろう。この一文は、その意味で、構文上も、論理展開の上でも、また最初の共同性の同意を表明する上でも、非常に重要な役割を果たすのであるが、それと同時に、彼らのそれこそ悲しい存在証明にもなっているので

ある。

<他者の思想>と<外部の導入>と言うにはおこがましい程に、絶望的に無自覚で無責任な主体である彼らの<われわれ>は、勝手に暴力的に、自己の存在証明を行なった後は、その暴力性を発揮し、後半部では、<声高で命令的な口調で>、<われわれ>を連呼する：「われわれは・・・普遍的、かつラディカルであると信じる」、「われわれは・・・望まない」、「われわれは・・・なすべきである」と考える。最初の<われわれ>の出現は、謙虚に、その暴力性を押し隠し、<西洋人>の裾の影から、虎の威を借る狐のように自己を主張していた。しかし、いったん成立してしまうと、その威光で周囲を威圧するかのようになり、もはやためらいはそこにはない。第一部の<事実認識>の部分も含めて、すべてが既定の、あるいは自明の事実であるかのように、そしてこの声明文全体が<われわれ>の創設へと収斂しているかのように、躊躇なく、それが創設された後、未来にわたってその力を<普遍的なもの>として及ぼそうとする：「われわれは、日本が湾岸戦争および今後ありうべき一切の戦争に加担することに反対する」。

これだけ声高に声明が宣言されるまでには、しかしこの声明の主体である<われわれ>という関係が、いわゆる<事実認識>を共有する以前には指定されないだけでなく、その事実認識の根拠も、また私たちが自らを<われわれ>と主張する根拠も、自分自身のうちには見出すことはできないのだ、という事実と直視しなければならない。結局、すべての根拠は外部に、つまり<西洋>というものの仲介に依存している。極言すれば平和論の多くが、疑うことなく<アメリカ合衆国と日米安保>の前提のもとに成立しているように、<われわれ>の存在さえも、私たちが、私自身に関わる共同性の表明を<われわれ>というかたちで行う際にも、その決定権は<他者>に委ねられる、という事実を、いみじくも、無意識のうちにてであろうが、語ったのがまさにこの声明文2である、と言えないだろうか。加藤の主張する「ねじれ」は、こんな場面にも侵食しているということであろうか。

世界大戦で、また全共闘の時代に追体験した、<われわれ>という共同性への強烈な誘惑は、屈折したかたちで抑圧されたまま、ある種の拒否感を底辺に育みながら、自然な議論をなおざりにされてきたように感じる。それは、<日本人>、<日本的>などという言葉がすぐにもナショナリズムに結びつけられるような、過剰反応を生みだす精神構造と全く同じであろう。ここに、<われわれ>が成立する際の危険な事態、<われわれ>という主体のおぞましくも危険な姿が示されている。<われわれ>と語る意識にも、また<われわれ>と語ることを避ける意識構造の中にも、この深いねじれた抑圧がパルタージュされている。その<われわれ>を問いかけるには、この<われわれ>の前にも、内にも横たわる危険性を感じ取る習性を身につけなければなるまい。

IV 一人称の<戯れ>

ここで、私たちの<われわれ>論を展開するにあたり、加藤が「立ちあげ」ようとする「われわれ」を、『敗戦後論』に立ち返って考えてみたい。そのために、まずこの作品で用いられてい

る〈語り手＝叙述の主体〉にスポットを当てて考察してみよう。この作品は、エッセーに近いかたちで出されているので、一人称を用いることへの特別な制約はないはずである。しかし、この作品を読んで感じるのは、なぜこれだけ多くの〈語り手＝主体〉を使い分けるのだろうか、という疑問ではないだろうか？勿論、学術的な論文などのような、論理を重視し、結論部にいたるまでの論証の整合性を求めるために、一人称複数による論者の一貫性が求められるわけでもなく、かといって文学的な、語り手として、あるいは登場人物としての一人称でもない。いずれにしても、この叙述の主体の多様性は、加藤自身の思想に、またこの作品の趣旨に密接に関係するものであろうという推測は成り立つ。

この作品では、〈語り手＝叙述の主体〉は大きく分けて四つに集約される。すなわち、〈わたし〉、〈わたし達〉、そして「 」付けの〈われわれ〉(以降「われわれ」で表す)、と「 」の付かない〈われわれ〉(以降〈われわれ〉で表す)である。それに、引用文の中に「我々」「われら」という表現もあるが、それらは上記の四種類に意味的には還元されてしまうのでここでは言及しないことにする。

最も多く用いられ、全体の論を主導する役割が与えられた〈語り手＝主語〉が〈わたし達〉である。頻度からするとそれに〈わたし〉が続き、次に「われわれ」が来て、最後に〈われわれ〉が全体で三度だけ用いられる、という構図になっている。

ここで確認しておきたいのは、加藤という人物が、自分の作品を表現する際に、どれほど叙述において、語り手としての主体、その一人称の選択を重視しているかということであるが、それは上野千鶴子との対談「戦後と女性」のなかで示されている。そこでは、上野の指摘に対して、人称、特に「僕」という表現へのこだわりを繰り返し語っている。さらに、この人称の選択が、いかにその思想、あるいは表現内容に直接関わってくるかを述べている¹⁰：「それで(〈ぼく〉を使って)書いていくと叙述が全然変わりますよね。〈ぼく〉を使わない場合とは。(・・・)そういうことを、ものを書く上での一つの自分の手ごたえにして書いてはきているつもりなんです」。

日本語特有の一人称を表現する言葉の多様性、そこでの選択が全体に与える影響、上野がその点を指摘し、アカデミックな論文が、決して一人称単数を用いず、一人称というより無人称の複数形を用いる、「いわば相手に普遍性を強要するような、そういう書き方」であるのと対照的に、加藤の一人称は意識してその桎梏から逃れ、自己を決して特権化しないことを自ら宣言するために〈ぼく〉という表現を、いわゆる社会的で公的な色彩の強い〈私〉からも区別して、用いていることを評価する発言をした後に、加藤はさらに自らの〈人称論〉を展開する。特に、一人称の複数形に対する彼の考えが開陳されているところなので、少し長いが全体を引用しておこう¹¹。

加藤：「それでもう一ついうと、ぼくは〈ぼく達〉というのを使っている(笑い)。昔は「われらの文学」とかいう考え方に拒否反応があったから、ぼくが〈ぼく達〉なんてことばを使っているときには古い友人が吃驚したはずですよ。そういうコトバは「こっ恥ずかしくて」使えない人

間であったんですけども、今は図々しくそれを使っているわけです。

ぼくが<ぼく達>というのをどう使っているかということ、ぼくのためには「われらの文学」の<われら>とは対照的な使い方をめざしていますね。つまり、あるものがあって、たとえば戦後世代とか全共闘世代とかあるでしょう。それを核にして、そういうものを指示することばとして<ぼく達>というのとは対蹠的な用法をめざしていると思っています。

<ぼく達>というのは<We>でしょう。あれは非限定的なことばですね。特に批評行為の細部で<ぼく達>ということばをどこまでも使っていくと、どういうことが起こるかということ、たとえばこれは『アメリカの影』の最後に乗せた「戦後再見」の場合ですが、話が満州事変あたり、近衛声明なんかに行きますと、この<ぼく達>がいろんなとんでもないことをやってくれるわけですね。南京虐殺とか。その時、その行為主体、旧日本兵ということになります。これを<彼ら>と呼ぶか<ぼく達>と呼ぶかということに一つの思想の問題があると思う。

ぼくが、今用いている<ぼく達>という人称は、全部とにかくアミーバみたいに<ぼく達>ということばで自分の周囲を呑み込んでいく。そういうふうに使っています。

<ぼく達>ということばは普通アイデンティフィケーションの道具として使われるのですが、ぼくはそれとは逆に使っている。意識的にやっているから、ただそんなふうに書かれている場合とはどこか違っているはず。それこそあるときにはぼく一人のことを指して<ぼく達>といっているところもあるし、<ぼく>とも言ってますね。あるときには非常に広まって、近代以降の日本人を全部含めている。一人称複数呼吸しているんですよ。」

上野：前半と後半とちょっと違うでしょう。<ぼく>を選ぶのと<ぼく達>は。じゃ

<ぼく達>と<われわれ>、<われら>はどこが違うのか、<私たち>はどこが違うのかとなりますね。

加藤：それは違いますね。

上野：<私たち>は<われわれ>に置き換えうる。

加藤の一人称複数に託した<戯れ>が見事に表現されている。<ぼく達>を用いることで、彼はまず、ある集団へと<一括りされる>ような帰属を拒否する（<われら>のような）次にその「非限定性」を徹底的に、活用することで、その境界を戦略的に拡大し、移動させる。この<ぼく達>は、<共通の>思想、イデオロギー、行為、出来事、時代などすべてを思うがままに横断して、それらのパルターージュを自在に操り、恣意的に、彼はそれを「思想の問題」というが、或るものは<ぼく達>に、或るものは<彼ら>に委ねる。「アミーバみたいに<ぼく達>ということばで周囲を呑み込んでいく」一人称複数形、それは不定形で、自らのアイデンティティを解体してゆく。脱構築するともいえるのだろうか（？）。この<ぼく達>に対して、ここでは<私たち>と<われわれ>は<公的性>を表示する点で置換可能なものとして、対置される。彼の人称に対する重層化された関係性の認識は、まず<ぼく> <私>の一人称単数のあいだの関係、そ

れが私的 公的・社会的、個体的 - 普遍的、<開放的> - <閉鎖的>、非特権的 特権的などという対比の関係で示され、さらにそこに重ね合わされる一人称複数の関係項、<ぼく達> - <私たち われわれ われら>。一つの<I, Je>、そして<We, Nous>が、もちろんそれらも内容とすれば非限定であるが、日本語における(一)人称の多重性がそれに輪をかけて、どこまでも分裂し、互いに向かい合い、差異化する。重要なのは、それが自己分裂であり、二項対立的な視点での対比関係で示されるということである。しかし、ここで注意しなければいけないのは、この自己分裂が、唯一なる<I>という一人称の<ぼく>、<わたし>、<おれ>への分裂であることである。それは、絶対に外在化しない分裂、そこには<向かい合う>他者は生まれない。まさに、自己に自己をどこまでも重ねる、多重人格化のモデルでもある¹²。

以上の点に留意しながら『敗戦後論』を読んだときに、一見ある統一的な一人称の活用に気付かされる。まず、「ねじれ」を前にして自己の説を展開するときには<わたし>が躊躇なく用いられる。この<わたし>と、<わたし達>が、厳密に境界策定され、使い分けられるのである。例えば次のようなかたちで¹³：

わたしは、こう思ったものである。

そうかそうか。では平和憲法がなかったら反対しないわけか。

わたしは、こういう時、一抹の含羞(?)なしに「平和憲法」を掲げる論者たちの感覚に、事態の深刻さを知らされる思いがした。また、わたし達に法の感覚がないことを、強く感じた。わたし達に戦争に反対する理由があり、それが、わたし達に戦争を反対させ、また、平和憲法を保持させる、順序はそうであるはずのところ、それが、そうではなかったからである。

<わたし>は、この日本社会の中に暮らしている。その意味で、<わたし達>の一員であるが、しかし<わたし>は違う。だから、誤解しないでほしい、<わたし>を含む普遍的な叙述の主体として、<わたし>は<わたし達>を用いているのではなく、いわゆる一般論的な叙述を、その意味で<わたし>とは距離のある、戦後日本人のあり方を<わたし達>として表現しているのである。<わたし>は<わたし達>に属しているが、根本的なところで隔たりがある。なぜなら、<わたし>だけが、戦後日本の「ねじれ」の認識を蝶番に、その受け皿となりうるのである。さらに重要なのは、多くの場合この引用と同様に、<わたし>が語る文は、行変えされ、「わたしは、こう思ったものである。」というように、独立した、周囲からは隔絶した、絶対的な(=ab-solu 切り離された)<一なる文>として表記されていることである。そこで、まずここで考えられる範囲で、<わたし達>に対する<わたし>の関係をまとめると次のようになる：

1) 自己責任と自己根拠としての<わたし> : <わたし>の固有な意見を明確にし、一般的な認識を離れ、自己の主張を表明する部分に関しては、決して論文的な「人称構造をわから」なくし、「普遍性を強制」するような偽善的な主語としての一人称複数はいないで、自己の責任

と根拠をすべて<わたし>へと帰着させる。

しかし、指摘しておかなければならないのは、多くの箇所、この<わたし>の代わりに<わたし達>を主語にする文を工夫することで、この<わたし>が表現する、内容や意味は伝えられるということである。

2) 自己確定 = アリバイ作りの場所としての<わたし> : <わたし>は、全体の叙述の流れから<ちょっと>離れているように、もちろん<わたし>は<わたし達>の歴史や現状の中に属しているが<ちょっと>離れた位置を占めている。この<わたし>だけが、戦後のねじれを知っているゆえに、汚れている<わたし達>と一線を描ることができるのである。このアリバイ作りがあって初めて、<わたし>は<わたし達>という共同性を断罪し、新たな共同性を創設できるのである¹⁴。

さて、以上の様な<わたし>と<わたし達>という関係に、新たなひろがりを与えるものが<われわれ>である。興味深いのは、<われわれ>と「われわれ」が、二重に区別されて意味が付託されていることである。この作品では、「われわれ」の使用が8回。この「われわれ」には、大岡の『レイテ戦記』の引用部分で用いられる、引用文では「」は付されていないが、その<われわれ>も対応する。『敗戦後論』の「われわれ」が、大岡の思考と密接に結びついているのは、その内容だけではない。それに対して、「」の付かない<われわれ>の頻度は3回だけに限定され、その意味は明確である。それは、『敗戦後論』の主要テーマが、日本人の主体としての、「新たな「われわれ」の立ちあげ」である点を考慮すると非常に興味深い例証を与えてくれる。それは以下の三例である¹⁵：

- 1) 「われわれは戦争に負けた。」
- 2) 「その「われわれ」は、無意味なことのために動員され、作られたわれわれである。」
- 3) 「ところで、この「英霊」を壊すものは何だろうか。それを壊すものは、けっして彼らと別種の共同体的な実体をもつわれわれではない。」

これら「」が付かない<われわれ>が表現する意味は、<戦前の、分裂する以前の一体化した人格である日本人>、これであり、その指示内容は一貫している。その敗戦以前の、<われわれ>に対して、新しい「われわれ」が、その表記の同等性 (<われわれ>という) から、<わたし達>を飛び越えて、向かい合う。まるで、この構図は、戦前の分裂を知らない無垢で、汚れを知らない日本人としての<われわれ>が、隔たりのない共同性である国家のもとで幸福だった、とでも言うかのように、「われわれ」の前に現れる。そこには、<わたし達>は介在しない。それは、この二つの<われわれ>の鬼子のようなものとして、両者が向かい合ったときには忘却されるのだろうか？ その際、戦前の<われわれ>への非常に強いノスタルジーのようなものが、行間から感じられると思うのは筆者だけだろうか。

V <わたし>へと収斂する<われわれ>

加藤は、「この「われわれ」が肯定命題であるとは、どういうことか」という問いかけを發し、それを受けるかたちで最終章をはじめ。この最終章は、彼の最大のテーマである「戦争の死者の弔い方」がテーマとなり、ここでまた、主要な箇所には一人称複数形の<戯れ>が展開される¹⁶。

それを理解する前に、<わたし達>と「われわれ」の関係が語られている次の一文を考察してみよう¹⁷：

国民をナショナルなものにするのも、その逆により開かれたものにするのも、わたし達である。そのわたし達という単位がいま、わたし達の手にはない。わたし達はやがて、このわたし達という単位それ自体が不要になるまで、これを風通しのよいものにしていくことを要請されているが、しかし、そのゴールにいたる道の始点は、けっして、「われわれ」から発想しない、国民という枠組みにたたない、ということではないのである。

ここに、奇妙で微妙な論理が展開されている。「わたし達という単位がいま、わたし達の手にはない。わたし達はやがて、このわたし達という単位それ自体が不要になる」と言われるように、<今はないが、いずれ不要なものになる>。ないものがいかなる根拠によって不要になるのだろうか。しかし、それが、戦争に敗れた後、「ねじれ」たままの状態、互いに反目しあって、日本という国家の国民であるという<共通な意識>をもちえない状態にいる。そのような<一個の人格>としての主体的統一をもてない人々の集合としての<わたし達>。対立する人々を、(異なる意見、主義、主張をもつ人々、異なる政党に属する人々をも、一度決定したなら)包摂し、<代表>するような「われわれ」という主体へと融合できない、自己分裂した主体としての<わたし達>。つまり、現在の日本人。その分裂を解消するには、国民としての「われわれ」の一体性の回復から出発しなければならない、ということ。もちろん、<国民>を意識することで、逆にナショナリズムに陥ることなく、開かれた「われわれ」を創設することの可能性を、加藤は問いかける訳であるが、しかし、絶対的な<わたし達>の不在と喪失、それは<過去にたどっても、現在においても、また来るべき未来にも>居場所を失い、完全に、加藤の世界の中から抹消され、まさに<影>へと追いやられてしまっている。自らを<わたし達>と語りながら、自らを否定して、自らを解体する主体。自己を否定するために自らを指示する主体。「われわれ」の立ちあげは、<わたし達>を徹底的に排除することによってしか成立しないという意味なのだろうか？<わたし達>はそこにいながらただ不在を明かす、ということは、極端に言えば、加藤の語る<わたし達>自体が、もともとどこにも存在しない、単に彼が<想像の主体>のパースペクティブのもとに投射したネガティブな影以外の何ものでもないのではないかと疑うことができないだろうか？

さて、そこから、「われわれ」が「肯定命題」として作用するわけであるが、しかし最終章で

は、この肯定命題としての「われわれ」が、文面上全く展開されずに消えてしまう。次の、一例を除いてまさに<亡霊>のように消えてしまうのである。それは、大岡の『レイテ戦記』の分析と平行して定義され「英霊」となる：「(無名兵士=無辜な=潔白な=まっさらな=汚れていない=「英霊」=「靖国神社」と言うような連鎖を可能にするのは、)むしろ名前という汚れをもつ個々の兵士からなる、もう一つの「われわれ」という観念なのである¹⁸」。すなわち、戦前の「共同体的な実体」としての、<われわれ>ではなく、「もう一つの「われわれ」」。しかし、この後「われわれ」という言葉は一度も出てくることなく、最後に次のような加藤の寓意的イメージの開陳によってこの作品は幕を閉じる¹⁹：

こういう情景が浮かぶ。

そこでわたし達は子どもで、石を手渡され、こういわれる。

「さあ、この石をできるだけ遠くに投げてごらん」

わたし達は精一杯、力をこめて投げる。

するとこういわれる。

「じゃあ、今度はそれを取りにいったごらん」

わたし達はずんずんと歩き、それを取ってくる。

わたし達はもう一度いわれる。

「ではもう一度、この石をできるだけ遠くに投げてごらん」

わたし達は行く。

わたし達は石を取って帰る。

わたし達は、またいわれる……。

きっとこの時、歩いて取りに行くその石をほんの少しでも手控えして投げたら、ゲームは終わる。それをすることの「意味」が消える。

この最後の最後に、彼が選んだ<語り手=叙述の主体=一人称>は<わたし達>である。この「わたし達」のイメージが寓意するもの、それがこの意味を超えて、ありうべきはずのない<わたし達>が「われわれ」へと昇華した姿とでも理解すべきなのだろうか。すると、「われわれ」が「肯定命題である」ということは、<わたし達>が「われわれ」と一体化すること、つまり新たな主体である「われわれ」と一体化することで、分裂している<わたし達>が、この「われわれ」という主体の中に同化、吸収され、その責任が担われるということになる。すると、急に<わたし達>と「われわれ」の連続性が回復される。当然この象徴的な主体である「われわれ」へのこの一体化が示すのは、それが<わたし達>を特徴付ける「ねじれ」から解放されるわけではなく、まさに「ねじれ」を「最後まで持ちこたえる」ことで、つまり<わたし達>をそのまま受肉することで達成されるということになる：「きっと、「ねじれ」からの回復とは、「ねじれ」を最後までもちこたえる、ということである²⁰」。

ここで、信じられないことが起こる。あの不在の主体である〈わたし達〉が復活する。それと同時にあれほど存在感と一体感を主張して来た「われわれ」の中に、逆に〈不在と喪失〉がもち込まれる。それは、同時に、「われわれ」は、〈われわれ〉も、また〈わたし達〉も受肉したと言うことで、他者であったそれらが、〈他者〉としての使命を終えたことをも示している。新たな主体としての「われわれ」の立ちあげが、別種の「われわれ」の創設が、一気にしぼんでしまったような気がする。何のために、これまで〈ねじれ〉を語り続け、〈わたし達〉を糾弾してきたのだろうか。それは、見せかけの〈他者〉として、〈われわれ〉や〈わたし達〉を、言うなれば「われわれ」の影として映写し続けることで、最終的に、自らの正当性の証人としようとする思惑の結果なのだろうか？いずれにしても、「われわれ」は、自らの他者を飲み込んでしまった結果、他者が喪失された。いやもともと他者などはいなかったのかもしれない。しかし、この結果は何を意味しているのだろうか？

そこで、もう一度「ねじれ」について考えてみよう。結局、〈わたし達〉を同化した「われわれ」は、「ねじれ」の中にも認識せず、無為に安住している〈わたし達〉に対して、この「ねじれ」の状況を認識し、それからの回復、つまり「最後までもちこたえる」ことを決意した「われわれ」である。この「われわれ」は、まさに大岡が語る「われわれ」である。それに対して、私たちはすでに、この『敗戦後論』の中で、たった一つの主体が、この一人称の複数形から逃れ、特別な位置を占めていることを知っている。それは、〈わたし〉であり、自らを単数で語るその主体は、〈わたし達〉で語られる戦後の「ねじれ」た状況の事実認識によって自らを差別化する。この〈わたし〉が、〈わたし達〉から距離を置き、単数形で語れるのは何よりもこの「ねじれ」を認識しているからであり、この「ねじれ」の状況に苦悶し、「ねじれ」の伝道者として、それを解消に向けて「最後までもちこたえる」覚悟があるからである。〈わたし達〉が最後まで無理解であっても、その時は「だったらおれが全部引き受けてやるよ²¹」と、見栄を張る〈わたし〉なのである。加藤のこの〈わたし〉、これだけが自らの資格において、大岡の「われわれ」を体現できる。つまり、『敗戦後論』においては、その人称構造からは、日本人の主体としてその立ちあげを期された「われわれ」の複数性は、その〈他者(性)〉を失うとともに、結局〈わたし〉という単数性の中に解消されてしまう。要するに、この〈わたし〉という単数性が、〈わたし達〉でもあるし、〈われわれ〉でも、「われわれ」でもある。先の引用文で加藤は、自信満々に次のように語っている：「それこそあるときにはぼく一人のことを指して〈ぼく達〉と云ってるところもあるし、〈ぼく〉ともいってますね。あるときには非常に広まって、近代以降の日本人を全部含めている。一人称複数呼吸しているんですよ。」

さて、さきほど、『敗戦後論』における〈わたし〉の役割を二項目にまとめておいたが、加えて、その最後の役割がここで明らかになったと思う。

3) 創設者としての〈わたし〉：最終的に、この〈汚れたわたし達〉は、「われわれ」と同化し、新たな主体として「立ちあげられる」ことによって、〈汚れ〉が内在化され、共有化される共同体が新たに創設される。この「汚れ=ねじれ」の共有を示す主体が「われわれ」であり、

その一体感は、〈わたし〉によって代表される。「われわれ」の単数化、それこそ「ねじれ」をも共有する「分裂した一つの人格」の回復であり、それが〈わたし〉である。〈わたし〉は、〈一なるもの〉であり、全体者であり、救済者であり、そして例外者でもある。だから、『敗戦後論』においても、〈わたし〉の記述には、できうる限り、行変えし、独立した一文として、差異を際立たせなければならない。

VI 他者の不在

『敗戦後論』は、まるで、〈わたし〉が勝手に作り上げた、三つの一人称複数とともに引き起こされた人称の〈戯れ〉であるかのように展開される。幻想と実在の狭間で、次から次へと新たな場面を展開することで、興味を繋ぎとめ飽きさせないが、しかしその裏で、あらかじめ決められた筋立てに従い誰かが操作しているようなゲーム仕立ての構成がなされている。

しかし、この作品は、私たちが〈われわれ〉論を始めるに際して、多くのヒントを与えてくれたような気がする。それが、「新たな「われわれ」を立ちあげる」という主旨とは裏腹に、最終的にその「われわれ」が〈わたし〉という主体に解消されてしまうというパラドクスを内包しているという事実は非常に重要であり、〈われわれ〉論の根本的な罫として、まず最初にその理由を問いかけなければならないだろう。

それに対しての〈応え〉は、この試論全体の中ですでに浮かび上がってきたと思うが、一言で言って、〈他者の不在〉であり、〈外部の喪失〉である。〈われわれ〉を問い掛ける際に、最も危険な罫は、〈あなた（達）=きみ（達）〉、〈彼（達） 彼女（達）〉、さらに〈それ（ら）

これ（ら） あれ（ら）〉、二人称や三人称で示されるものが、いつの間にか一人称の中に、また本来複数の他者の集合であるはずのものが、いつの間にかその単数形の中に包摂されてしまうということである。〈われわれ〉の自在性、指示範囲の恣意性、それはすべての〈隔たり〉そして〈差異〉を抹消して、〈境界〉をどこまでも侵食してしまう。加藤は、上野との対談から分かるように、これらすべてを承知しながらも、この〈一人称の戯れ〉に戯れるのであろう。例えば、〈わたし達〉ですべてを括らずに、場合に応じて、レファランスを明確にする意味でも、また〈わたし〉との距離を確認させる意味でも、〈敗戦後の日本社会〉、〈現在の日本人達〉などという具体的な主語を、勿論数少ない例としては彼も用いているが、使用することなど彼にとっていとも簡単なことであつたはずである。しかし、彼はそれを拒否しているのであろう。具体的なかたちで、言語を〈分節〉することは、〈隔たり〉と〈境界〉を、つまり〈外部〉を認めることであり、〈他者〉に向かい合うことであるが、加藤はそれを拒絶しているようではないか。すべてが〈わたし〉の思いのまま。それが加藤の語る「自己中心主義」、あるいは「私的」なあり方なのだろうか。この〈わたし〉は、〈他者〉、あるいは〈他者〉であるべきものを、〈アメーバ〉のように触手を伸ばして吸収、同化してしまい、〈われわれ〉の中に取り込んでしまう。その結果、〈外部〉も、〈外部〉との境界も、それゆえ〈差異〉も、いずれなし崩しに曖昧化されてし

まう。

加藤 高橋の論争が、具体的に収斂するところは、<国内の三百万人の死者と外国の二千万人の死者を甲う>に際して、どちらを優先すべきかという点にある、が、加藤は<国内の三百万人>を先に、その実感を通して、次に<外国の二千万人>を、と主張するのであるが、私たちが分析した彼の論理からすると、<外部>はいずれ<内部>に吸収されることになり、結局<外部>の、あるいは<外部>という独立性はいずれ失われることになる。つまり、<内>を先にした甲いは、次なる<外>の甲いに際しては、<外>を<内>に同化したかたちでしか行えないということである。<外>を外の視点から、<他者>を他者の視点から見る視点が欠けている。彼も、縷縷、現代思想で語られる<他者の思想>について、批判的に言及してはいるが、彼の<他者の思想>への誤解が、あるいは曲解が、他者と自己を二項対立的な構図の上に措定することで、結局は他者を自己のうちに融合するような暴挙へと帰結させるのであるが、彼の思索に根本的に不在である本来の<他者>や<外部>の意味を、まさに主要なテーマとしながら、私たちの<われわれ>論を問いかけるのは次の試論に委ねることにする。

第一部終り

注

- ¹ 加藤典洋の論評をまとめた作品の中で、特に、『戦後を超える思考』(海鳥社、1996)、『敗戦後論』(講談社、1997)、『戦後を戦後以降考える』(岩波書店、1998)、『日本の無思想』(平凡社、1999)、『戦後の思想』(講談社、1999)、『天皇の戦争責任』(径書房、2000)を参照。高橋哲哉の加藤批判は、『戦後責任論』(講談社、1999)などを参照されたい。
- ² 加藤が『敗戦後論』などで展開する、「自国の死者の追悼を「先に」置く他国の死者への謝罪と哀悼という死者の甲い方」の基盤にあるのは、身近な死者に対する<内側>の実感や直感から出発するということであるが、この思考方式は彼にとって譲れない最も基本的な主張で、多くの場面で繰り返されている。そして、この点を理解しない人間を、彼は躊躇なく、語る資格のない者として断罪する。例えば、「当事者が当事者を裁くということがいったいどういうことなのか、そのことが十分に、批判している高橋さんにおいて受け止められているとは思わない。高橋さんは、いわば第三者として語っている。」(『戦後を超える思考』p.268)。また「内 内」の関係としてのコミュニケーションについては、『天皇の戦争責任』における加藤と橋爪大郎との対話を想起されたい。
- ³ 真下仁、「共同体の周縁/終焉に」(東海大学短期大学紀要、1996)。および、「<singulier- pluriel>に戯れる存在論」(九州フランス文学会文学集 32、1997)など参照のこと。
- ⁴ レヴィナス、『われわれのあいだ』(法政大学出版、合田・谷口訳、1993)。「哲学、正義、愛」p.159:「現代哲学における、ヒューマニズムへの同様の不信は、主体と言う概念との闘争を伴っています。主体が喚起するような人間的なものをもはやはらむことのない知解可能性の原理が、人間の運命への気遣いと関わることのない原理が求められているのです。」
- ⁵ 「哲学の死」などというような表現において問いかける彼らの態度は、勿論脱構築の表明であることは認めるが、しかしヨーロッパ独特の思ひ上がりと開き直りが感じられないだろうか。哲学=西欧の思索法=死(終末、限界)のように単純にイコールで結びつける思考法は、そこからの排除する暴力を当然示している。
- ⁶ 『敗戦後論』、pp.15 - 18。
- ⁷ 同上、p.15より。
- ⁸ 『敗戦後論』においては、声明2についての批判が主として展開されているが、決して彼が声明1をそのまま受け入れているわけではない。「たとえば、「声明1」の「日本国家」の戦争加担に反対する、という言い方には、「日本」とも「日本政府」とも違う留保がこめられている。その留保とは、つきつめていえばどこにも着地点をもたない、指示性を弱められた、文学的ニュアンスにほかならない(p.17)」という批判がなされている。
- ⁹ 同上、p.15の「引用の正確を期せば、この二つの声明のうち、前者には署名42名の名前が、後者には、「文学者の討論集会 事務局」と声明者16名の名前が、声明の日付とともに記されている」との加藤の一文が、内情を如実に物語っているのであろう。
- ¹⁰ 加藤『戦後を超える思想』(p.26)所載、上野千鶴子との対談「戦後と女性」(初出は1986)。

¹¹ 同上、p.21-22。

¹² 加藤は、戦後日本人の「人格分裂」を語るが、私にとっては、この「人格分裂」というものは、日本語に特有な「自称の分裂」にも対応したもっと普遍的な特質のように思われる。例えば、その一つの主要な事件が、外来の漢字を表記文字として受け入れるような出来事であるが、そのような際にも、当然「自称の分裂」、(表記文字にあわせるために)が結果したであろう。このように、「外部」の事柄を「内部」へと吸収、同化する行為、また「外部」を前にして「内部」を形成しようとする行為などを通して、日本が自らの生き残りをかけて行って来た自己防衛の結果が「自称の分裂」などに現れているのではないだろうか。多分このような事件は、その起源が特定できないくらい遠い昔に遡及できるであろうが、この無 起源なる回帰としての忘却された記憶が、明治維新あるいは戦後にも、一つの類型を作り出すと考えることもできよう。

¹³ 『敗戦後論』p.14。

¹⁴ 『敗戦後論』特にp.74 - 76 参照。「わたしは個人的には、この平和憲法をわたし達にとり、貴重なものと考えながら、こうゆう(第九条の平和原則が国民投票で捨てられる)事態は好ましくないが・・・」この「わたし」が自己のアリバイづくり以外の何ものだろうか。なぜ、彼は「この平和憲法をわたしにとり」と言わないのだろうか。「また、後者についても、わたしの考えははっきりしている。/ 戦後、何より天皇の名のもとに死んでいった兵士たちへの道義的責任を果たさずに死んでいった昭和天皇に、わたし達はどのような言葉を向けるのがよいのか。/ さして天皇に敬愛の念をおぼえることのなかったわたしに思い浮かぶのは」。なぜ、昭和天皇に向ける言葉が「わたし」のではなく、「わたし達」のであり、その時々には両者を使い分けるのであろうか。また「わたし達がアジアへの戦争責任を明言し、アジアの二千万の死者に謝罪するという時、それがジキル氏の明言、謝罪でないとはどういうことか。その明言の論理が、わたし達が今ここにいるために死んだ自国の死者への哀悼とつりあい、その謝罪がこれら死者をつうじてわたし達のものである時、それは一人格としてのわたし達の明言であり、謝罪なのである。/ここでわたしは先の問いに戻る。/ (・・・)アジアの死者を悼むという時、わたし達はいつも自国の侵略者たる三百万人の死者を、脇にのける。その瞬間、わたし達の哀悼はジキル氏の、腰の軽い、清く潔白な哀悼に変わる」。なぜ、このような「わたし達」の重苦しい、また「わたし達」へと還元するには余りに問題のある叙述の間に、全く形式的なといえは言えるが、しかしなぜこのような流れの中に、わざわざ「わたし」を挿入する必要があるのか。すべてが「わたし」のアリバイづくりを暴露しているようにしか、「私」には思えない。

¹⁵ 『敗戦後論』のそれぞれp.30、p.82、p.84 による。

¹⁶ 同上、pp.83-84 を参照のこと。

¹⁷ 同上、pp.52-53。

¹⁸ 同上、p.84。

¹⁹ 同上、pp.92-93。

²⁰ 同上、p.93。

²¹ 『戦後を超える思考』、加藤 西谷対談「世界戦争のトラウマ」、p.275 より。